

第 2 4 回・早大 O C 大会 in 「二子山」

～ 1 4 年で地図表記はどう変わったか～

佐々木 順 (サン・スーシ)

第 24 回早大 O C 大会は、88 年以來 14 年ぶりにリメイクされた「二子」を舞台に行われた。この間に作図技術はどの程度進歩したのか、今回と 14 年前の地図を見比べながら考えてみた。

1) 地図調査体制の変化

かつての学生大会における地図調査は、数度の調査合宿でクラブのほぼ全員が山に入り、調査技術を先輩から受け継ぎながら行われていた。全体的に調査能力は低く、採択対象は道、植生界、岩、がけ、建物などの明確に取りやすいものが主体だった。等高線については適当に曲げただけという場所すらあった(当時を思い出し反省)。

最近目立つプロ Mapper による地図では、総じて等高線表現のメリハリに特徴がある。以前多用された植生界、岩がけなどの表記は明確なものを以外は捨てられ、シンプルに仕上がっている。

2) 地図作成環境の変化

OCAD をはじめとするパソコン用地図作成ソフトと、プリンタなどの出力環境が進歩したことを指す。かつての地図は黒の製図ペンを用いて作成したシートから版下を作成、印刷という流れで、線の太さのムラがよく問題になっていた。最近では地図データを PC 上に持つことができ、版下作成まで可能となっている。コースもソフト上で版を作成し、プリンタで印刷するのが普通になり、ろう原紙に鉄筆でコースを書き、位置合わせに気を使いながら、ローラーでインクをねじ込んで印刷という日々は過去のものとなった。

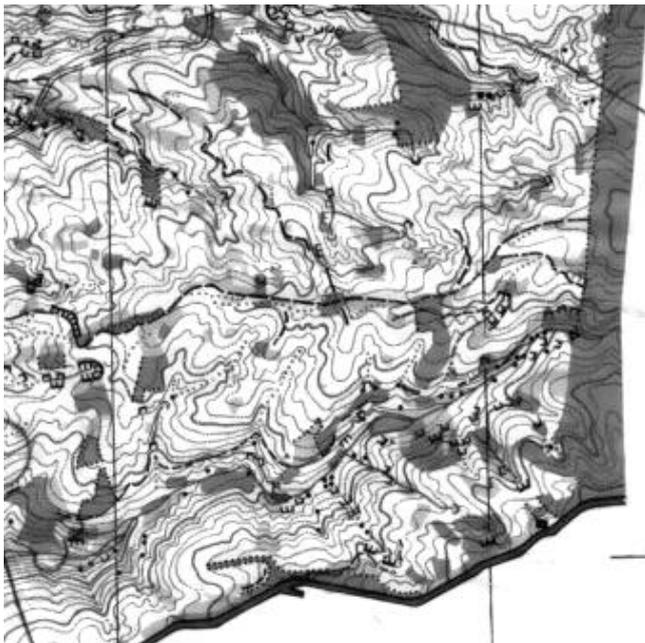
3) 国際的作図基準の導入

国際的な O-MAP の作図基準である ISOM2000 に沿った形で地図が作成されるようになり、日本独自の表現は影をひそめ、世界のどこの競技者が日本に来て、同じ感覚でオリエンテーリングができる

ように改められた。

最近でこそ、この基準によって作成された地図が増えてきたが、今でも時折戸惑ってしまうことがある。たとえば崖について、高い方から低い方に出される「ひげ」はかつて必ずあったが、現行の規則ではスペースが無い場合は省略も可となっている。そのために地図上では道と区別のつかない場所が多々ある。

今回の O C 大会では、地図南東側にある送電線の表記(二重線)が主要道路に酷似しているために、エリートの選手も含めてマップアウトなどの混乱に陥ったことが報告されている。冷静に考えれば、高低差のある尾根を突っ切るように線が伸びていることから、このような道は存在し得ないのだが、競技中、しかもスタート直後にこれを見ると、間違わずに情報を認識できる自信は全くない。まだまだ新しいスタイルの地図への慣れは必要ようだ。



1988年2月 早大 O C 作成「二子山」
(原図 1:15000 を右図と同縮尺まで拡大)



2002年2月 早大 O C 作成「二子」
(原図 1:10000, ほぼ原寸大)